

# 中国語と日本語を用いた多言語タイポグラフィについての研究：中国語と日本語併記の本文における書体、字間と行間、約物の用法と組版の比較検討

楊, 寧

<https://doi.org/10.15017/1543992>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（芸術工学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	楊寧			
論文名	中国語と日本語を用いた多言語タイポグラフィについての研究 —中国語と日本語併記の本文における書体、字間と行間、約物の用法と組版の比較検討—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	伊原久裕
	副査	九州大学	教授	佐藤優
	副査	九州大学	准教授	須長正治

### 論文審査の結果の要旨

日本語と中国語を併記する印刷物が珍しくなくなった今日においても、読みやすさや調和を欠いた問題のあるタイポグラフィが少なくない。本論文は、中国語と日本語を併記した印刷物の本文組版を対象として、視覚的に調和のとれた日中言語併記のタイポグラフィを実現するうえで必要な条件を明らかにする試みであり、1) 日本語と中国語の調和ある書体の組み合わせ、2) 両言語それぞれの読みやすい字間、行間の範囲、3) 約物の用法と組版の3点に具体的課題を絞り、実証的な手続きを通して考察を行っている。

本論文は5章の本論から構成される。第1章では、日本語と中国語併記の事例を収集し、レイアウトの類型を4つに整理し、現状の併記のタイポグラフィの問題点を類型ごとに明確化した。日本語と中国語の文字体系は、ともに漢字を含んでいることから、併記は一見容易なようだが、同じ書体はほとんどなく、また字間、行間についても異なる扱いが多く見られ、適切な併記についての意識や知識が欠如していることが問題点として明らかとなった。この結果を踏まえて、次章以下、書体、字間と行間、約物の項目ごとに検討を行っている。第2章で日本語と中国語の調和ある書体の組み合わせを探った。日本語と中国語の基本的な書体分類として明朝体と宋体、ゴシック体と方黒体の組み合わせがよいとしても、それぞれの分類に含まれる書体も数多くある。検討の結果、本研究では漢字に限定して、書体の属性として、プロポーション、字面の割合、フトコロの大きさを取り上げ、それらを計測しクラスター分析を行い、その結果を基に書体を分類した。その結果、日本語と中国語のいずれも3つのグループに分類され、グループ毎の書体を組み合わせることが有効であることが分かった。第3章では、日本語と中国語それぞれの読みやすい字間と行間の範囲について、同一の実験方法に基づいて日本と中国で調査を行った。従来、読みやすいとされる字間、行間については、日本、中国いずれにおいても経験則に基づいた目安はあるものの、実証的な検証はほとんどなされていなかった。本研究ではブラウザに字間と行間を自由に制御できるプログラムを作成し、このプログラムを用いて、被験者が字間と行間を比較して、読みやすいとする組み合わせを選択する実験を行った。その結果、特に中国語では字間を広くとることがしばしば推奨されていたが、日本語、中国語ともに、字間はベタ組、行間も全角から四分の三が読みやすい範囲であることが判明した。第4章では、日本語と中国語の組版に関する規範書を収集して、約物の用法・組み方についての規則を抽出し、比較調査を行った。その結果、両言語に共通する約物の種類、用法、禁則規則を明確にすることができた。第5章では、以上の結果を踏まえて、第1章で提示した4つのレイアウトの類型毎に、適切な書体の選定、読みやすい字間と行間と約物を共通化した条件で適切な事例を制作し、本研究結果の実践的な有効性を確認した。

以上の知見は、効果的な中国語と日本語併記のタイポグラフィのための基本的指針を提供する実践的な研究であり、同時に日本語と中国語の組み合わせにとどまらず非ラテン語文字を対象とした今後の多言語タイポグラフィ研究への理論的貢献も大いに期待できる。よって、本論文が博士(芸術工学)の学位に値するものであることを論文調査委員全員が判断した。